

東京バツ八合唱団の今後を考える

臨時団員総会 議事録

9 月 9 日、月曜日の練習会場である目白聖公会集會場で、臨時の団員総会が開かれ、東京バツ八合唱団の今後が話し合われました。

以下に、当日の議事録を掲載します。団員の枠を広くこえて、後援会員、団友の皆様をはじめ多くの方々と共に、今後のさらなる飛躍を模索しつつ生きていきたいと願います。

4 年前に、主宰者・大村恵美子が月報(437 号、1998 年 11 月号)で訴えた「21 世紀を迎え 最終段階に入る東京バツ八合唱団」に、もう一度お目通しいただきながら、お読みいただければさいわいです。上記の記事は『東京バツ八合唱団 40 年の記録』、175 頁から 182 頁に載録されています。

臨時団員総会

日時:2002 年 9 月 9 日(月)、午後 6 時 30 分より

会場:目白聖公会

出席者:23 名(敬称略)

大村恵美子、橋本眞行(松山バツ八合唱団主宰者)

(S)荒井・小口・柿沼・片岡

(A)高野・田中・三上・森永・藤沢・中山・平田・梅干野・石塚

(T)大村・島津

(B)加藤・山下・松尾・室田・千葉・片岡

議長:T大村健二

書記:A平田輝子

[議長]

主宰者より、次の事柄について、団員の皆様の意見を伺う機会を設けたいという申し出があり、今日は臨時に集まっていた。

今後 5 年間の活動計画

1998 年の月報第 437 号で発表した 10 年間の活動計画がほぼ半分終了したが、今後の 5 年間で素案どおりに進めていくか。

2008 年以降の活動のあり方

現状の態勢での活動は、2007 年に一応終了する予定でいたが、その後どのようにしたらいいか。

計画前半の活動は、ほぼ当初の予定どおりに行なわれたが、4 つの変更ないし追加があった。CD 録音計画に関連して、2000 年予定の小ミサ曲ト短調がカンタータ 56 番に、2002 年予定のカンタータ 122 番が 61 番になった。楽譜出版は、2004 年からの予定が 2000 年からと前倒しになった。CD 発行も 2003 年からの早まった。40 年記念誌の発行は、計画には明示されていなかったが実現した。

1998 年の計画立案当時は、団員も減少傾向にあり、そのまま続けていくことに団員の間で不安が見られたが、当時と今とでは状況も変わってきたので、その計画を見直す必要があるのではないか、ということだと思うが。

[大村恵美子]

今まで 5 年間の活動に対する評価と、今後 5 年間のこの計画どおり進めるのかどうか、についてのご意見を伺いたい。

期限付きを前提に計画したので、演奏会予定の内容を詰め込みすぎたかも知れない。今後は練習量が多すぎるのであれば再考の余地がある。

最後に組み入れたマタイやクリスマス・オラトリオは、赤字を残して終るのではという心配があったので、ソリストなしの合唱主体の形をとってみた。

2007 年で活動を終了することについて、現在皆さんはどう思っているか。その先は何もきめなくて成り行きに任せるのか。

また今年創立 25 周年の松山バツ八合唱団が、この先東京バツ八合唱団と共同の演奏活動を試みてくださるお気持ちがあるかどうか、橋本さんにお聞きしたい。

楽譜の出版が始まり、今後はそれを使用しながら、さらに活動をしてゆくことには意味があるのではないか。

心身ともに強い意欲をもち、健康でないと主宰者

は続かないので、その点どなたが今後リードしてゆかれるとしても、心配である。ただきれいごとで音楽面だけの指導者では務まらない。

1. 今後5年間の活動計画について

[議長]

まず、これまでの経験の反省をとり入れながら、今後の演奏計画等に対する皆様の意見をお聞きしたい。当初の計画どおりでいいか、変更ならばどのようにするべきか。

[S片岡]

来年からまったくの新曲ばかりなので心配だが、大丈夫か。

[A森永]

素案はそのままでもいいが、マタイなどは聖書朗読と合唱によるのではなく、原曲どおりに演奏することを目指せばいいのではないか。

[大村]

過去にマタイを演奏したときには、会計の配慮などもあって、体をこわしてしまった方もあった。そのくらい没頭してくれる人がいないと上演は無理なのではないか、団全体に勢いが出て、よほどやる気がないと難しい。

[橋本]

創立記念パーティーのときにもお話したが、お役に立つことがあれば希望に添える覚悟はあります。7月に子会社へ転籍したので少し時間の余裕が今後出てくるかもしれない。現在は毎週東京、松山を往復する生活を送っている。

マタイを合同でやることは不可能ではないので前向きに検討していきたい。

[B加藤]

2007年のマタイを、できれば松山バツハとジョイントでやることを目標にさせていただくのはいいのではないか。

橋本さんの指導を、まず手始めにカンタータで、野尻湖演奏会からはじめたらどうか。大村先生も松山に出向き相互に交流を深めていけば無理なく可能性が広がるのではないか。ぜひ橋本さんには、月に1回程度の指導をしていただきたい。そうして双方のつながりを模索していくのがよいと思う。

[大村]

カンタータの定演を、まず2人で前後に分けて指揮してみたらどうか。

[橋本]

仕事があと2,3ヵ月後にはめどがつくので、月曜の練習には参加できそうだ。現在は土曜、日曜が松山バツハ合唱団の練習日で、土曜の朝松山に行き、日曜の夜東京に帰るという生活をしている。

[大村]

前回のマタイの演奏会は、私自身も当初はこんな小さな合唱団では無理だと思っていたが、カール・リヒター氏が亡くなり、追悼の気持ちで急に決心ができた。いろいろ無理はあったが、なんでも思い切らないと実現しない。

[A高野]

やはりマタイは本格的にやってみたい。

[議長]

では、いろいろご意見が出たところで皆様にお聞きします。2007年までの定演は予定どおりで進めるか。モテット1曲は通常10分くらいだが、第1番と3番は20分以上かかる。

[S柿沼]

すべて歌いたいが、たとえば第93回定演の演奏正味120分(モテット2番、カンタータ1、26、30、47番)は、聞く方も歌うほうも大変ではないか。

[大村]

2008年以降も継続する気持ちがあれば、1回の演奏内容をもう少しゆるやかにしてもいいと思う。

団員の演奏会費用負担が団員数減少の一因になるのではというおそれがあるのなら、たとえば将来は定演を年1回にして、あとは野尻湖で新しいカンタータを披露するのも一案だ。

[B山下]

分量が多くてもむしろサービスになっているのではないか。通常はモテットの演奏は難しいが、わがバツハ合唱団は大丈夫なのでこの案でいいと思う。

[B加藤]

「50曲選」で出版される楽譜の全曲を歌うためにも、カンタータは当初の予定どおり歌うべきではないか。

[A田中]

ぜひモテットも早く歌ってみたい。早めに練習をはじめて欲しい。

[大村]

もう2003年5月の演奏予定はチラシで公けになったことだし、内容の多さがどんなに大変かやってみて、また考えてもいいのではないか。カンタータ30番は長いけれど繰り返しが多いので、それほど難しくはない。

[議長]

今後5年間の演奏計画についてのおおかたのご意見は、2003年5月定演のお客様の反応と団員の様子

年度	定演	演奏予定曲目	備考
2003年	93回 94回	カンタータ第1、26、30、47番、モテット2番 「クリスマス・オラトリオ」後半、カンタータ第40番	BWV1-50より
2004年	95回 96回	カンタータ第77、78、93、99番、モテット4番 「クリスマス・オラトリオ」前半、カンタータ第72番	BWV51-100より
2005年	97回 98回	カンタータ第116、129、137、147番、モテット5番 「クリスマス・オラトリオ」後半、カンタータ第123番	BWV101-150より
2006年	99回 100回	カンタータ第180、187、194、197番、モテット6番 聖書朗読と合唱による「クリスマス・オラトリオ」前半、カンタータ第192番	BWV151-200より 定演100回記念
2007年	101回 102回	聖書朗読と合唱による「マタイ受難曲」、モテット3番 聖書朗読と合唱による「クリスマス・オラトリオ」後半、モテット1番	創立45周年公演 創立45周年公演

1999年から2002年までは実施済み、または第92回定演(12月15日)で実施予定

2003年からの選曲:カンタータ曲目はBWV番号順の50曲ごとに年間5曲を選曲、モテットを年間1曲

—2006年第100回と2007年は、独唱者なしでレチタティーヴォ・アリア部分は聖書朗読とする。

をみてからその後を決めることにする、ということ
で如何でしょうか。またマタイについては、いまから
早めに準備をして臨む、ということのようでした。

<休憩10分をはさみ8時00分再開>

の活動が少し希薄になっているので一度初心に戻り、
バッハの音楽を松山に根付かせる目的で年3回1曲
くらいずつ常設のオケを含め組織化の途中にある。
レクチャー付きで教会でやる形式に戻るようにして
いる。

フライブルク・バッハ合唱団との協力を通じて、今
度は自分たちだけでできるように実力を高めていき
たい。

現在は2,3年に1度フライブルク(松山市の姉妹
都市)との交流をしている。2004年にはフライブル
クに行きドイツ・レクイエムを歌う予定になってい
る。すでに返事をしてあるが、将来のことはまだ流
動的だ。

演奏旅行があれば、ぜひ東京バッハ合唱団とも一
緒に参加するようにしたい。

2. 2008年以降の活動のあり方について

[議長]

現在は先のことは見通せないの、おいおい考え
ていけばいいとは思いますが、2007年で終了するとし
たことの趣旨に関し、5年経過した今の段階で、主宰者
から改めてもう一度意見を述べてもらいたい。

[大村]

1998年の時点では、定演のたびに赤字が続き、こ
の先も団員の負担が重くなってゆくのではないかと
いう危機感が強かったので、期限を区切れば、みん
なが気分を新たにしてくるのではないか
と思った。

後援会は、これまで年間200万円前後の支援をい
ただいているが、これを打ちきると運営は困難にな
る。友人知人から広がった後援会だが現在はだいぶ
広い範囲から集まってきている。月報発行も後援会
維持の大きな要素になっていると思う。2008年以降
も団を続けるなら、後援会も存続していただく意思
を固めたい。

[議長]

マタイの演奏のこと、橋本さん個人の考え等もふ
くめて、松山バッハ合唱団の今後の構想を聞かせて
いただきたい。

[橋本]

まだ組織がしっかりしていないし、自分たち独自

[議長]

将来の運営のあり方について、みなさんの意見を
聞かせていただきたい。

[B片岡]

歴史の重みに対して大村先生の存在を含め大きな
力を感じている。このまま続けるしかないのではな
いか。全員の気持ちでここまで続けてこられたし、
これからもその力があれば続けていけると思う。

[S片岡]

入団2年目なので、目の前のことでいっぱい先
のことはまだ考えられない。少しでも長く歌いつづ
けていきたい。

[T大村]

芸術団体では、運営主体と演奏指導者は別々にす
るとというのが世の趨勢だ。組織運営や財政上の問題
を主宰者1人が背負わなくて済むような体制を整え
ていくべきではないか。

[B千葉]

できれば現状どおり続けていってほしい。

[A 高野]

団員だけだと、お金の問題が絡んでくると活動が縮小していく傾向がある。

[T 島津]

自主的にやるべきだが、そうするとやはり縮小する方向にある。現在は先生の個性が大きく、急に転換は無理で、今から考えておくべきだと思う。

[大村]

今は順調にきているが、赤字になると団員に負担してもらわなくてはならないということになり、やめる人が増えたりするので、やり方には注意が必要だ。これからは団員用のコピー・印刷代や雑費は団会計から徴収するようにしたりして、後援会の建て直しに頑張りたい。

[A 中山]

私は先生がいらっしゃるからこそ続いているので、感謝している。

[A 藤沢]

先生に永遠にお任せするわけにはいかないので、必然的に移行していかなければならないだろう。課題については随時団員に周知させ、関心を高めることが必要だと思う。

[S 小口]

私は大村先生の合唱団だと思っている。もし先生が辞めるとおっしゃられない限りこのままでいき、自主運営はその後でいいのではないかと。先生が続けられるまでこのままでいってほしい。

[A 石塚]

入団したばかりの私はバッハの魅力にとりつかれている。ただそれだけです。

[A 平田]

私は先生のお年を聞いてびっくりした。先生だからオケやソリストの方も便宜を図ってくれていると思うので、対外的には先生にできるだけ長く表看板としてでもいて欲しい。ただ実際の仕事は団員で負担していかなければならないと思う。財政的なことは団員から少しくらい徴収しても構わないと思う。

[A 三上]

先生は、新しい後援会員の方に対してすぐに手紙を書いてくださったり、その反応の早さに感心している。団員は皆さん仕事もち、つかず離れずきたと思うが、先生の魅力は大きい。私はバッハを歌いたいのが経済的には大変だ。しかしいつも支えてくれる人がいて今まで続けてこられた。私の生きる希望にもなっており、ここのところ体力も回復してきたのでこれからも頑張りたい。

[S 荒井]

最初、この発表を見たときはどうしようと思った

が、この先が見えてきたのでとてもうれしい。運営も先生の負担を軽くするようにしていくべきだと思う。

[A 梅干野]

まだ入団して1年しかたっていないが、初めて会議に参加させていただいてうれしい。バッハが好きなので、これからどのくらい歌えるか不安だが、先生にはいつまでも頑張っていたきたい。

[B 加藤]

最近先生が2008年以降のことを話して下さるようになったので、そのお考えを知って考えていきたい。先生と活動とのかかわりはどうなるのか分からないが、方向性は変わっていくのではないかと。

[B 松尾]

40年以上の歴史はずっと継承してほしいが、運営面については少し変わらざるを得ないだろう。企画、実行、人脈、フォロー（月報）等は先生ならではのこと、ほかの人では真似できないのではないかと。バッハの音楽をぜひ伝えていきたい。また日本語訳も貴重だ。

[議長]

2007年までは、原則として予定どおりの活動を行なっていきたい、ということが共通の認識のようだ。

これからの運営方法については、今後の演奏会準備も含めて、団員ひとりひとりが自主的に考え行動してもらおうことになるので覚悟していただきたい、ということになるでしょうか。

<以上8時55分に終了>

明かるい展望の臨時団員総会

大村 恵美子

1998年11月号月報に、合唱団の将来に関する重大発表をして、2007年までで一応、定期演奏会にはピリオドをうつとお知らせしてから、4年がたちました。その間、合唱団の活動は、私が素案をかかげた予定表どおりに、ほぼ正確に実現されてきました。2000年には、20世紀に別れを告げ、バッハ死後250年を記念する、死をテーマとしたプログラム。2001年には、21世紀を迎え、バッハ最晩年のカンタータを集めた祝祭のプログラム。2002年には、合唱団創立40周年を記念し、バッハ生涯の集大成の「口短調ミサ曲」を、年代順連続演奏のしめくりとする意味も兼ねた公演として、やりとげました。

このように、イベントが重なり、それに適応す

る長期計画が功を奏したのか、ピリオド提案をした1998年以後は、あらゆる面において合唱団の運営は、安定、充実の方向に向いてきました。

その間、予定よりも4年早く開始された「カンタータ50曲選」の楽譜出版にも勢いづけられて、かつてなかったほどの好調がつづいています。

私は、自分自身も団員も後援会の方々も、どんどん加齢して、体力も減り、意欲も経済力も下向いてくるのが自然なので、自然消滅をただ待つのではなく、合唱団として終りをりっぱに全うしたい、という意図から、あのピリオド提案を発表したのですが、いま40周年を迎え、長期計画の半ばにさしかかったこの時期に、もういちど全般的な見直しを、団員の皆さんと一緒にしてみる必要があると考え、9月9日に、臨時総会を開いていただいたのです。

何よりも、団の将来は団員の意志によって決められなければなりませんので、皆さんの率直なお気持ちを知りたかったのです。私自身としては、ある時期までは、若い層がどんどん減り、高年の方ばかりになりそうなのが気がかりだったこともあり、ところが今や、日本社会全体の少子高齢化がはっきりしてきて、定年過ぎた方々の、これから自由な人生を、と元気になれるのを見て、団員の高齢化はおそれるに足らず、むしろ30年、40年と共に歩んできた仲間が、60歳、70歳といつまでも元気で歌いつづけるのは、積極的な価値のあることだと、確信しました。

それに、若い人たちも、また入団してきています。もうあまり年齢を気にすることはないのです。一般的にみても、意力だって、経済力だって、結構高齢層が、日本社会を強く支えているのです。

そう考えて、原案の2007年までの計画が終わったら、また新しく、存続させる形で計画をつくり出そう、そういう総会になれば最高、という希望もよせていました。

この日は、松山バツハ合唱団の橋本眞行さんも、呼びかけに応じて出席して下さり、今後いろいろ協力なさる意志も示してくださいました。そして、私が最も懸念していた、「マタイ」2007年上演についても、今からコストのことを覚悟して、早くから準備し、オーケストラもソリストも完全な形で整えた演奏を目ざそう、というところに意見がまとまったようでした。それには、大規模なモテット1番、3番など、別の機会をつくって上演するとか、カンタータにしても、1回の定演には詰め込みすぎと判断される場合には、2008年以降にのばしても、いくらでもかかってよいではないか、と、柔軟に考えるよう

な大勢になりました。

つまり、2007年で合唱団のすべての活動をやめてしまうのではなく、存続できる形を新しく考えながら、つづけてゆこう、ということなのです。1998年当時の、低下へのおそれから転じて、その後の重なる成功の自信で、みんなの気持ちが上行指向になってきたといえましょうか。

ああいうことも、こういうこともできる、と、いろいろ具体案も挙げられて、出席者一同の表情は明るく、大筋では現在の歩みを肯定して、「マタイ」上演その他の、大きな課題に向け、結束を固める結果となった総会といえましょう。私もまだ元気、団員もいっそう元気、大丈夫、と確認できた日でした。今後は団員の自主的運営の傾向を強めてゆく意向とのこと、大いに期待しています。『東京バツハ合唱団40年の記録』出版の大成功が、りっぱにそれを証明してくれました。

合唱団の活動4分野に関するご報告とお願い

後援会

合唱団の通常会計および演奏会会計は、折々の臨時収入に支えられながらも、赤字累積から脱し、このところ順調な運営をとりもどしてきています。

ただ、そのしわ寄せとして、後援会がまた低迷するようになってきました。すでにお知らせしたとおり、ここ3年間の年間収支は、次のとおりです。

	収入	支出	収支差額
1999年度	2,128,500	2,055,026	73,474
2000年度	2,044,000	2,043,937	63
2001年度	1,416,000	1,805,025	389,025
累計残額			188,041

(単位：円、各年度は1月～12月)

2002年に入ってから、8月末現在で、累計残額が538,937円の赤字となっています。

原因としては、後援会費の入金が増減したこと(退会の方がふえたことと、1998年度に、2007年までの10年分を一部の方が一括送金して下さったこと等による)が第一にあげられます。また、他の呼びかけ、たとえば「バツハ・カンタータ50曲選」の購入とか、その出版債券へのご協力に応じられたこととか、合唱団の活動を一応2007年(創立45周年)で区切りとする、というお知らせの影響もあったかもしれせん。

何といても、後援会発足からも40年たちました。

第一戦を退かれて、年金生活に入られた方々もふえたことが、現実でしょう。

今後は、支出を切りつめる方向に努力して、収入に応じた活動に切り替えてゆこうと思いますが、本号の、団員臨時総会での結論でお知らせのとおり、東京バツハ合唱団は、2008年以後も力強く存続させてゆこうということになりました。活動がつづけられるかぎり、年間約200万円規模の後援会収入は、増減があるとしても、やはり欠くことのできない活力源となりますので、年12,000円の会費が重すぎるようになられた方は、折りに応じたご寄付でも結構ですから、引きつづきご支援いただければさいわい입니다。また、新しく入会なさる方が得られますよう、定期演奏会ごとに充実した演奏をし、PRにつとめてゆきたいと思ひます。後援会に対するご支持を、おねがい申しあげます。

「バツハ・カンタータ 50 曲選」出版協力債券

月報480号(2002年6月)で、「締切り迫る」のお知らせをしました。締切り期日は2003年12月31日で、まだ先なのですが、3月に発表と同時に、予想外の速さで多くの方々が応募してくださり、そこで「締切り迫る」の中間報告をした次第です。現在、

680口(入金額1口9,000円)

で、予定目標800口(5月に100口追加)まで、あと120口を残しています。

楽譜出版と並行して計画されていた50曲分のCD発行も、予定を早めて2003年早々に、第1集を制作することになりましたので、そちらのほうにも、役立てたいと思ひます。もしご協力いただけるようでしたら、お早めにご応募いただければ、たいへんありがたく存じます(1口あたり9,000円でご応募いただき、満2年後に10,000円でお戻しする。要項をご請求ください)。

『東京バツハ合唱団 40 年の記録』

7月1日の創立記念日を期して発行したこの300ページの記念誌は、大好評で、多くの方々から絶賛をいただいています。もうあと100部ほどしか残っていませんが、ぜひお読みいただきたく思ひ方々で、まだお申し込みのない場合もあり、もしお忘れでしたらとても残念です。同時代の貴重な記録を、どうぞお手元にお備えいただけますよう、お申し込みをお待ちします(送料込み¥1500)。

第92回定期演奏会

本年12月15日の定期演奏会(マニフィカトとカ

ンタータ第61番)は、合唱団創立40周年記念公演にあたります。去る5月の記念公演「ミサ曲口短調」にひきつづき、40周年を祝う充実したクリスマス・コンサートとなりますよう、ご家族・ご友人おさそい合わせでご来聴いただけますことを、期待してあります。
